

令和 2 年 9 月 11 日現在

機関番号：31605

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05718・19K20915

研究課題名（和文）児童養護施設で暮らす子どもへのグリーフケアの開発

研究課題名（英文）Developing Grief Care for Children Living in Foster Care

研究代表者

八木 孝憲（YAGI, TAKANORI）

福島学院大学・私立大学の部局等・講師

研究者番号：70827344

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：その生い立ちゆえに、施設児童は家庭で生活する児童よりも多くの喪失体験をすると考えられるが、施設児童の喪失体験やそれに伴うグリーフケアについての研究、実践はほとんど行われていない。そこで、本研究では施設児童が体験する喪失体験やそれに伴うグリーフ体験の実態とその必要性を明らかにすることに取り組んだ。施設児童が経験すると考えられる喪失体験を、発生頻度と職員にとっての扱いにくさを尋ねた。結果として、慣れ親しんだ環境の喪失と死など取り戻すことのできない喪失という2つの要因が存在することが示唆された。こうしたことから、施設生活の中にある喪失体験にも目を向け、必要に応じてグリーフケアを行う必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまであまり触れられてこなかった、施設児童が体験する喪失体験やそれに伴うグリーフ体験の実態とその必要性を明らかにすることに取り組んだ。その結果、彼らは様々な喪失体験を日常的に経験していることが示唆された。また、死と関連する喪失体験について、施設職員は特に強く扱いにくさを感じていることが示された。

こうしたことから、施設児童に対する心理的ケアについて考える際、過去のトラウマやアタッチメントに焦点を当てるだけでなく、施設生活の中で少なくない喪失を体験していることを考慮し、施設生活の中にある喪失体験にも目を向け、必要に応じてグリーフケアを行う必要があることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）： Institutionalized children are expected to experience more loss than children living at home. However, there has been little research and practice on institutionalized children's experiences of loss and the grief care that accompanies them. There is no such thing. The present study was conducted to examine the actual conditions and necessity of grief experiences among institutionalized children. In this study, we worked to clarify the We asked about the frequency of loss that children in the homes are likely to experience and the difficulty of handling them for the staff. As a result, we found that there were two factors of loss that could not be recovered, such as loss of the familiar environment and death. The results suggest that there is a need for grief care for those who have experienced loss in institutional settings. Therefore, it is important to pay attention to the experience of loss in institutional life, and to provide grief care as necessary.

研究分野：福祉心理学

キーワード：児童養護施設 喪失体験 グリーフケア

## 1. 研究開始当初の背景

児童養護施設(以下,施設)は,虐待等の理由により家族と生活することができない子どもたちにとっての,家庭に代わる生活の場である。彼らは心理面,行動面で様々な問題を抱えているとされ(Widom, 2014 他),特にトラウマからの回復やアタッチメントの修正,再形成といった過去の経験に対する修正的接近の視点からの支援が行われてきた。しかし,彼らが示す様々な問題のすべてが,過去の虐待や親子関係から影響を受けていると考えられているわけではなく,施設という生活環境の影響を受けていると考える視点もある。

施設児童の暮らしに目を向けると,彼らは施設生活の中で実に多くの別れを経験していることに気付かされる。例えば,施設では職員の離職率が高いことが問題となっているが,それは毎年のように子どもたちが一緒に暮らしてきた職員との別れを経験していることを意味している。また,施設が担う役割の特性上,子どもたちの入所,退所が頻繁に行われている。特に,時に退所は退所する子どもにとっても,それを見送る施設での生活を続ける子どもにとっても,突然訪れることも少なくない。施設職員や他の児童との別れに際し,多くの場合,しっかりと別れに向けた作業が重ねられるわけではなく,むしろそうした別れは「なかったこと」のように生活が続けられることもある。しかし,そもそも様々な形で家族との別れを経験してきた施設児童にとって,そうした別れは複雑な感情が喚起される機会となり,喪失体験として経験されていると考えられる。しかし,施設児童の日々の生活の中の喪失体験に焦点を当てた研究や実践は,ほとんど行われていない。

## 2. 研究の目的

上記のような子どもたちの喪失体験に伴うグリーフ(悲嘆反応)についての支援であるグリーフケアの取り組みは,例えば東日本大震災以降,家族との死別を経験した子どもへのグリーフケア(高橋他, 2013, 佐藤, 2013 など)についての報告が見られるなど,我が国でも少しずつ行われるようになってきている。施設児童が施設生活の中で死別ほどの大きなインシデントに曝されることは少ないかもしれないが,過去に重大な喪失体験を持っていることが想定される施設児童においては,職員と一緒に暮らしてきた施設児童との別れにおいて経験するグリーフに目を向け,その実態を明らかにするとともに,必要とされる心理的支援について検討することは重大な課題であると考えられる。

そこで,本研究では,施設生活の中で施設児童が経験する喪失体験とグリーフの実態を明らかにすることとした。

## 3. 研究の方法

本研究は,施設児童が日々の施設生活の中で経験する喪失体験とその際に示すグリーフについての実態を明らかにすることを目的とし,施設職員に対する調査を通して,施設児童が日々の施設生活の中で経験している喪失体験の内容や頻度,またその後の子どもの反応(グリーフ),それに対して行われている支援内容についての実態を明らかにする。

### 1. 調査項目

Goldman (2000) が示した子ども時代に起こりうる喪失をもとに施設児童が経験すると考

えられる喪失体験を具体的に挙げ、その内容について施設心理職(経験者含)2名で検討し、質問項目を作成した。それらの項目についてどのくらいの頻度で発生しているか(発生頻度)と職員にとっての扱いにくさを尋ねた。

## 2. 調査対象

2018年11月～2019年6月に全国の児童養護施設に調査票を郵送し、主任等に回答してもらった(回収率32.8%:164/500施設)。

## 4. 研究成果

### 1. 喪失体験の発生頻度

施設児童が経験する喪失体験の頻度を「全くない」「数年に1回程度」「年に1回程度」「数ヶ月に1回程度」「月に1回程度」「月に数回程度」から選択し、回答してもらった。最も頻繁に発生していたのは「実習生との別れ」で3割を超える施設で月に1回以上、経験している実態が明らかになった。この他、「家族との面会交流の途絶」や「他入所児童の退所」を高い頻度経験しており、施設児童は高い頻度で何らかの喪失体験をしていること明らかになった。(Table.1)

Table.1. 喪失体験の発生頻度

項目	全くない	1回/数年	1回/年	1回/数ヶ月	1回/月	数回/月
職員の離職	1.2	26.8	67.7	4.3	0.0	0.0
他入所児童の退所	0.6	12.8	53.7	32.9	0.0	0.0
きょうだいの退所	7.3	82.9	9.8	0.0	0.0	0.0
職員の死	84.1	15.9	0.0	0.0	0.0	0.0
子どもの死	90.9	9.1	0.0	0.0	0.0	0.0
実習生との別れ	2.4	0.0	3.7	59.8	21.3	12.8
家族との面会交流の途絶	4.3	51.2	27.4	14.6	1.8	0.6
家族の死	21.3	76.2	2.4	0.0	0.0	0.0
職員の結婚や妊娠	79.9	18.3	1.8	0.0	0.0	0.0

表中の数値は回答者に占める割合(%)を示す

### 2. 職員にとっての扱いにくさ

職員が考える喪失体験の扱いにくさを「0 扱いやすい」～「5 かなり扱いにくい」の5件法で尋ね、扱いにくさを得点化した。最も得点が高かったのは「家族の死」(3.34)であり、次いで「子どもの死」(3.21)、「職員の死」(3.05)、「家族との面会交流の途絶」(2.81)であった。逆に最も得点が低かったのは「実習生との別れ」(0.80)であった(Table.2)。

### 3. 職員にとっての扱いにくさを規定する要因

職員にとっての扱いにくさがどのような要因によって規定されているかを明らかにするため、扱いにくさ得点について主成分分析を行った。その結果、第2主成分までの累積因子寄与率が60.36%、第3主成分の累積因子寄与率が66.97%であり、第1主成分の固有値が突出して大きく、第2主成分の固有値から小さくなり、それ以降の固有値間の差が小さく

なっていることが示された。したがって、それぞれの固有値間の値に大きな差がない第3主成分以降は検討から除外し、第1主成分、第2主成分で検討を加えることとした。

第1主成分への負荷量が高かった項目を見ると、入所に伴う支援者やコミュニティとの別れや教師、他入所児童との別れなど、慣れ親しんだ環境との別れの要素が含まれていた。

一方、第2主成分への負荷量が高かった項目を見ると、子どもや職員の死のように二度と会えなくなるような心理的ダメージが大きな別れの要素が含まれていた。そこで、第1主成分の得点の高さは慣れ親しんだ環境の喪失の程度の高さを示し、第2主成分を取り戻すことのできない喪失の程度の高さとした。それぞれTable.2に主成分負荷量を示した。

Table.2. 職員にとっての扱いにくさの主成分分析

質問項目	第1主成分	第2主成分
入所に伴う近隣（支援者）との別れ	0.799	-0.278
入所に伴う教師との別れ	0.788	-0.332
他入所児童の退所	0.771	-0.085
入所に伴うお気に入りの物（物品）との別れ	0.759	-0.198
施設内での他児童の移動（ホーム間移動など）	0.758	0.067
住み慣れた環境・地域との別れ	0.752	-0.109
きょうだいの退所	0.738	0.277
入所に伴う家族との別れ	0.731	0.214
職員の離職（配置転換含む）	0.721	0.09
入所に伴う友達との別れ	0.714	-0.147
措置変更に伴う前養育者との別れ	0.701	0.154
一時保護所職員との別れ	0.691	-0.449
入所に伴うペットとの別れ	0.684	-0.213
一時保護所での友だちとの別れ	0.641	-0.401
家族との面会交流の途絶	0.628	0.324
実習生との別れ	0.513	-0.313
子どもの死	0.365	0.788
職員の死	0.428	0.735
家族の死	0.529	0.701

施設で起きる子どもの喪失体験の発生頻度やそれに伴うグリーフケアを行う際の扱いにくさを検討した。施設児童は実習生との別れや家族との面会交流の途絶など様々な喪失体験を日常的に経験していることが示唆された。また、そうした喪失体験に対するグリーフケアについての扱いにくさを尋ねたところ、一緒に暮らしていた子どもの死や家族の死など、死と関連する喪失体験について、特に強く扱いにくさを感じることを示された。また、そうした扱いにくさを規定する要因について主成分分析によって検討したところ、慣れ親しんだ環境の喪失と死など取り戻すことのできない喪失という2つの要因が存在することが示唆された。こうしたことから、施設児童に対する心理的ケアについて考える際、過去のトラウマやアタッチメントに焦点を当てるだけでなく、施設生活の中で少なくない喪失を体験していることを考慮し、施設生活の中にある喪失体験にも目を向け、必要に応じてグリーフケアを行う必要がある。また、グリーフケアを行う際には、環境の変化を伴う喪失体験と死のように二度と会えないような喪失体験とでは、職員にとっての扱いにくさの質が異なる可能性が示唆されたため、様々な場面を想定したグリーフケアを行うトレーニングを職員が積むことも必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 八木孝憲 井出智博
2. 発表標題 児童養護施設におけるグリーフケアの実態とその必要性
3. 学会等名 日本福祉心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----